守り続ける

秋田県立西目高等学校 総合学科 農業科学系列　2年　柴田 椛

「この牛搾ってー」そんな会話ができるようになったのはつい最近のこと。中学1年生のときに、実家を継ぐことを決心した。家では、ホルスタイン120頭を飼育していて、そのうち搾乳牛は60頭。中3になって、「将来どうしたい?」と母に聞かれ、その時初めてきちんと話し合った。「正直、自分が経営するのは自信がない、生き物だからちゃんと管理してあげないといけないし、今まで見てきているから大変なのはわかってる。でも、ひいおばあちゃんの代から続いてるものが自分の代で途切れるのは、嫌。牛も土地も受け継がれてきたものを全部守りたい。」その時まで、両親は無理して継がなくてもいい、やりたいことをやりなさいと言ってくれていた。だが、私の思いが伝わったのか優しく、「ありがとう」とだけ言ってくれた。そして母は、今度一緒に北海道に行こう。と誘ってくれた。

北海道での体験は、今まで自分が見ていた酪農の考え方を大きく変えてくれた。まず訪ねたのは、ホルスタイン約80頭を飼育している酪農家さん。牛の他には、野菜の販売もしていて、すごく楽しそうだった。家はやっていないが、放牧もしていて牛たちがのびのびと暮らしている姿を見ることができ、初めて見るアブキャップや牛が気持ちよさそうに体をこする大きなブラシ、そして何より北海道の広くどこまでも平らな草地に心が弾んだ。牛舎の仕組みは、牛舎から牛たちがそのまま運動場に行ける形になっており、すべての牛が放牧できる構造だった。家には小さな運動場はあるのだが、放牧はしていないため放牧に対してすごく憧れがある。放牧をさせてあげたいと思ったのは、うちにいる牛は足を痛める事が多いからだ。寝床には、草やおがくずを敷いているが、その下はコンクリートのため、立ち上がる際に擦れて痛めてしまったり、夏場牛たちがバテたりすることを、放牧することでストレスを軽減し、乳量が減ることを防ぎたいと思ったからだ。家にいる牛たちが広く大きな土地でのびのびと暮らしている姿を想像して、いい環境で育ててあげたいと、そう思った。

自分にできるかどうかわからない。今でも将来のことで不安に思うことが多い。高校1年生のとき、親が草地の仕事で帰りが遅かったとき、夕食を姉と二人で食べていた。私は中学1年生の途中まで、将来は姉がうちを継ぐのだと思っていた。しかし姉は管理栄養士の道に進みたい、そう話していたのを聞いて、私が継ごうと思った。食事中突然「本当に継ぐの?やりたいことはないの?」と聞いてきた。いつかお姉ちゃんに話したいな、そう思っていたが突然聞かれて言葉が出てこなかった。お姉ちゃんとはなんでも言える仲で、いつも一緒にいたので気まずく思うことは一切なかったはずだが、本音を話したら不安に思わせてしまうのではないか、もしかしたら、申し訳ないと思わせてしまうのではないか、どう伝えるのが正解なのか、相手を傷つかせないためにはどうしたらいいのか考えた。「継ぐよ。継がなきゃなくなっちゃう。

牛好きだし。やりたいこともないもん。でも、自信はなんにもないよ。今日みたいに0時になっても仕事終わらない時もあるし、草地と搾乳どっちも完璧にできない気がして、それが不安」と時間がかかっていろいろ考えて、結局お姉ちゃんには嘘がつけず、本音を言うことができた。時間がかかる私とは違い、「そっか、でも草地のときは手伝いに来るよ。家はいつもそうでしょ？搾乳だって大変なときは手伝いに来るよ。休みの日も来るし。」とすぐに姉は言ってくれた。ずっと不安だった。伝統はすごく大きくて重みのあるものだと思う。それでもちゃんと守りたいものは最後まで守るべきであり、酪農は一人でできる仕事ではないため、家族一丸となってやるべき仕事だと改めて感じた。そして何より、その時姉と話す時間があって本当に良かったと思った。小さい頃から物事をできるようになるのに時間がかかった。でも焦らず、一つ一つ納得できる形の仕事をしていきたい。自分にもできるかな、と思った。

休みの日など、牛舎に立って仕事をする一日は、朝4時半に起床、5時から搾乳が始まる。外にいる牛を連れてきたり、数頭搾ったり、除糞作業や餌を食べ終わった牛の前をほうきで掃いたりしている。搾乳が終わったら仔牛にミルクをあげ、下の牛たちに草を与える。それも終わると、牛以外の馬やヤギ、鶏などに餌を与え、最後に一周除糞作業をしたら朝の仕事が終わる。私はいつか、放牧をしたいと考えているため、牛舎の立て直しを頭に入れている。今より頭数を少なくして、一頭一頭の質を高めたい。そう考えるのは、牛を評価するテストで、エクセレントの数を増やしたいと思っているからだ。骨格や乳房の左右の大きさの違いなど様々な点で、マイナスになる理由が「動く」ということをしていないのも理由になっていると思ったからだ。ずっと同じような姿勢でいると骨が曲がることもあるし、それこそ床に足を擦って腫れてしまうこともあるからだ。一頭一頭の管理をするには、今のやり方では時間が足りないと感じることがある。そのようなことから、いつかはロボット搾乳を導入したいと考えている。搾乳してる際の家族との会話の時間も大事だと思うし、実際に牛を手で触れながら搾乳をして気付く点もあると思う。しかし、ロボット搾乳を導入することによって、今したいと考えている放牧や牛舎の立て直しなどを準備する時間が作られ、新しいことにチャレンジする一歩を後押ししてくれると私は思う。今学校で習っていることも生かして、野菜を作ってみたり、その野菜を販売したりして地域の人達との交流も深めたいとも考えている。

秋田では今、後継者不足で酪農をする人が減少している中でも、非農家の人でまれに酪農がしたい！という人がいる。酪農がしたいという同じくらいの世代の人がいるのはすごく嬉しい。将来もしできたら私は私と同じように、後継者で将来的に不安をいだいている人の手助けができるような人になりたい。酪農という仕事を広め、未来の酪農に貢献できる人材になりたいと思っている。高校卒業後は、北海道の地で酪農が学べる大学に進学したいと考えている。進学することに賛成してくれた両親に感謝し、酪農家の子供に生まれた

ことを誇りに思い続けたい。